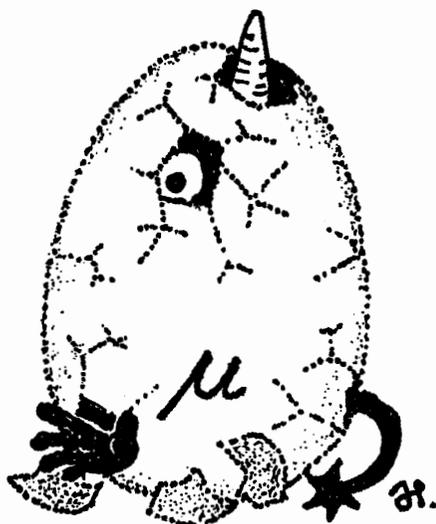


日本生物學會誌

第 17 号



日本生物學會

1984年 3月30日

アナクシマンドロスの

生物発生説に関する若干の考察 (2)

澄 田 宏

登場人物の略称

アナクシマンドロス：マンドロもしくは万泥子

ケンソリヌス：ケンソもしくは犬刷

ヒッポリュトス：ヒッポもしくは必掘人

アエテイウス：アエテもしくは会亭

テオプラストス：テオブラもしくは手降子

アリストテレス：テレスもしくは途照子

4. タレスの水

前節(本誌13号438ページ以下)において、万泥子の「湿ったもの」の取り扱いには注意を要することを述べた。それはタレスの水と同一視されてはならない。両者は同一の対象を指す言葉ではないのである。この2つの概念は、それぞれが彼らの思想の文脈の中で担っている、特有の役割や異なる地位をもっている。そういうことを指摘しておいた。そのちがいをやや際立たせて見するために、まず本節では「タレスの水」について、少々述べてみたい。

途照子の『形而上学』では、後出する資料9で見られるように、タレスの水は疑いもなくほとんど「湿ったもの」と同一視されている。この同一視ないし混同がタレス自身に帰因するものかどうか、もちろん不明である。というのは、「湿ったもの」がタレスの用語であったことを伝える資料は存在しないからである。そこで、途照子のこの同一視が、彼自身のアルケー観からの推断であるものと見なして考えてみることにする。というゆえは、水がそれだという「アルケー」の語がタレスの用語ではないことは、ほぼ間違いないからである。

テレスは、「タレスの水」を、それがアルケーであるかぎり、資料Bによって万有を構成する(または、万有を理解していくことができる)持続性をもった物質的要素であると考え。つまり、

万有の多様性は、始源の水そのものから生成して、その本性を変えないまま様態を変えていくことによって起こるとする。すなわち、万有はいずれにしろ何らかの湿った状態のものと考えているのである。確かにこの観点からでは、水と湿ったものとの間にどんな区別も立てられないだろう。かくて、「タレスの水」は湿ったものと区別されない段階のものとして、途照子の理解の中で整理されることになった。

しかし、実際にタレスの水とはどんな水であったのか。

ところが、この水を分析していくための資料は、テレス抜きでは語れない。というのも、これに関する現存資料は、ほとんどどれも途照子に由来するものだからである。テレス以外の資料として、手降子の『ピュシカエ・オピオネス』を伝えるシムプリキオス（以下シムプリ、または身振記と略記する）の伝承もあるが、その該当する箇所ではストア派の用語がひん出し、これが身振記による書きかえであることは疑いがない。そういうわけで、ここでは途照子を唯一人の証人と呼ぶより他はないのである。

さて、途照子は、前節でも述べたように、タレスを念頭においた記述の中で、

資料8 アリストテレス 形而上学 I. 3. 983b 6

さて、最初に哲学した人たちのうち、大部分の者は、ただ素材の形をしているものだけを、万有のアルケー <「始源」ないし「原理」と訳す>であると考えた。すなわち、存在するすべてのものが、それから成り立ち、最初に生成したのは、それからであり、最後はそれへと、消滅してゆくところのもの、(このとき、実体の方はそのまま持続してゆくけれども、その様態の方に変化が起こる。) このものを、かれらは存在するものの要素であり、原理である、と言う。そして、それゆえに、かれらは、このような自然原質はつねに保有されているのだから、絶対的には何ものも、生成もしなければ、消滅もしていない、と考えている。

と断定して、独自の目的論的宇宙観から哲学史を書き始めていく。

哲学はだれから始まったのか、すなわち哲学の創始者の設定は、哲学や哲学史の定義なくしてはできないから、この決定は重大な意味を含むことになる。つまり、タレスをその適格者とする決定は、それに先んじて、この哲学史家に哲学体系の構想を要求することになるからである。そして、その体系に組み込むことができるかぎりにおいて創始者としてのタレスを選ぶことになる。そこではこの資格に余計と思われることはタレスから切り捨てられ、タレスに不足するものは、逆に「補われた」かもしれない。なにぶん非凡な史家が明白な意図をもって体系を作り上げようとしているのであってみれば、なおさらこの傾向は強いであろう。そこに、途照子によるタレスの伝承と取り扱いが、どこまでタレスその人の学説の確実さを保証するか、疑われてくる余地はあるわけだ。しかし、今はとにかく「タレスの水」について、かれの証言を聞くことにしよう。

資料9 アリストテレス 形而上学 I. 3. 983 b 20

しかし、この〈万有の原理を素材の形でのみ考える〉型の哲学の創始者であるタレスは、原理（アルケー）は水であると言っている。それゆえ、かれは大地は水に浮いていると公言した。これは、たぶん、万有の養分が湿っていることを知ったこと、また、熱そのものが湿りから発生し、また、それによって生きていることを知ったことから、抱くに到った仮説であろう。万有が発生するところのものが、万有の原理（始源）なのだ。

この資料で、タレスの真の学説部分は、せいぜい、「万有の始源は水である」と、「（それゆえ）大地は水に浮いている」との2つであって、それ以上に見るべきではないだろう。資料後半部の評釈は明らかに途照子の推測である。しかし、推測が当たっていないと言うことはできない。

さて、このタレスの2つの命題のうち途照子が強調したいのは、もちろん、前者の方である。そのことは、かれが、「万有が発生するところのものが、万有の原理なのだ」と、この引用を締めくくっていることから知られる。この確定的な評言を下すために、もう1つの命題は必要不可欠のものではない。よって、かれがその命題にあえてここで言及する必要はなかったろう。それにもかかわらず、これを引用しなければならなかったのは、なぜか。

それは、これが「タレスの水」学説の無視しがたい重要部分であったからではないか。というのも、途照子がした数少ないタレス学説の紹介のうち、この「大地は水に浮いている」という命題は、他の著作においてもくり返えされているからである。

資料10 アリストテレス 天体論 II. 13 294a

また他に、大地は水の上に伸びて横たわっていると主張する人たちがいる。すなわち、これはわれわれが受け入れている最古の学説であって、それをミレトスの人タレスが述べたという。この説によると、大地は丸太あるいは何か他のそのようなものと同じように（これらがどれも空気の上には在留せず、水の上に滞在することを本性としていることから）浮いていることによって動かずにいる、と言うのだ。

いまこの証言を信じることにすれば、これらの資料から率直に感じとることができるのは、タレスが水を、途照子が言うような素材とか要素として原理的に見ようとしただけではなく、それをもっと広い実践的領域において生まれる関心から探究しようとしているように思われる点である。ところが、途照子は、タレスの水の着想を古代神話やホメロス詩章の全くの伝承とは言わないまで

も、それらとの類似を際立たせることによって、この着想の独創性にはほとんど顧慮せず、それらを伝承した方の可能性をむしろ暗示する。かくして、その暗示によって、この着想を呼び起こしたタレスの生き生きとした実際的な関心の方までが見失なわせられてしまっているように、わたしには思われるのである。

少なくともこの命題は、タレスが水を、それがものを浮かべるか沈めるかという経験の場に実際に臨んで、たとえば、航行中の船が難破するというような危機に出合って起こる関心から見ることによって得たもの、と考えることができるのではなからうか。この種の興味が心の内に生じるのは、想像や思考に没頭しているときではありえず、必ずものを観察しているか、何か活動をしているときかであろう。つまり、タレスにとって水は、個別的経験ないし特定の関心の対象となるものであって、経験や観察から切り離された形では問題にされなかったのではないか、ということである。

このように考えてみると、タレスの水は、途照子が熱心に見い出そうとした万有の成素としての「水」の概念の外に、あるいはそれ以上に、存在のすべてを安定して支える基礎としての水の概念、あるいは万有がその中に生成する支持環境としての「水」の概念ではなかったか、と推測されるのである。

そうして、さらにタレスは、宇宙万有のうちに起こる動に対しても関心を持ち、ある種の動は水に帰因することを、観察から推測したらしいことが伝えられているのである。それは、直接資料としては真正性が疑われているけれども、手降子に由来する資料とされている、次の伝承のうちに見られる。

資料11 セネカ 自然研究 III 14

というのは、かれ<タレス>は世界は水によって保持されていて、船のように運ばれているのだが、地震と言われているのは、そのとき、水の動揺によって不安定になるのだ、と述べているからだ。

この資料後半の地震の原因のくだりは後代の解釈が注入されたものであるとして、ティールス『ギリシア学説誌』p. 225によって退けられている。その理由は、後代の学者が地震の原因を（地震そのものを研究しないで）、それを研究したらしいタレスを研究することによって求めようとしたが得られなかったために作り上げてそう入した記事だ、という想定による。たしかに文献学的に正確を期そうとすれば、「大地が水に浮く」という推論の根拠となるものとしてタレスが挙げた前提もなければ、反対に、この命題を仮定にして、これからタレスによって導き出されたであろうどんな推論も伝承されていないのだから、「大地が水に浮く」とこと地震とが結びつく資料は何

ひとつないと言う外はなく、したがって、タレスに地震原因を説明した事実はなかった、と言うことになるかもしれない。

しかし、タレスという人物が原因探究（思索）癖が異常に強かったことを示す例は、ヘロドトス『歴史』2巻20のナイル河増水説やテレス『デ アニマ』1巻2章405a 19の磁石有魂説に現われる、ややけん強附会の態度に見ることができるのである。大地浮動の考えが、かれ自身による原因説明を欠いていたとは思われない。そして、その原因研究は、基礎的な風速や風向、気温や水温などの微妙な変化の測定から始まり、この場合のように潮流や津波ないし高潮の観測といった、自然異変の前後における注意深い比較観察を経験することなしには生まれなかったろう。地震の原因を水の動揺とする説は、単なる想像の産物ではなく、観察に基づく類比的思考から生まれたものとして十分に考えることができるものである。

一般に資料上の制約の大きい研究においては、文献学的には確実性が乏しい資料からでも、可能性のある推測を引き出すことが研究者の能力に求められてくる。こういう推測が許され、認められることがなければ、塗照子のタレス観を一義的解釈だと言って批判することだってできなかったろう。なぜなら、ティールスのこの批判も、資料の伝統的解釈から自由になったとき可能になったのであって、より確かなタレス資料の新発見の結果ではないからである。

この地震の原因説明に、「タレスの水」の原理性を示す1つの有力な例証を見ることが許されれば、「タレスの水」はその解釈に新たな可能性を開くことになるだろう。すなわち、その水は、万有を沈めずに浮かすこと、言い換えれば、上下に動かさず安定して、それを支持するものである。それと同時に、支持する力をもつことによって、水平にも垂直にも、ないしはその合成としてあらゆる方向に、万有を操り動かすものとして考えられることになる。すなわち、それはまた宇宙的規模の原理としても考慮されていたのではないか、ということが推測されるのである。

再びここでテレスの証言資料9にもどろう。その後半の推論は、タレスの水の「万有支持」の物理的概念をさらに生命現象の領域に拡張させ、生命を維持し保存させるものとしての熱 —— 1種のエネルギー様のものか —— という生理学的・生化学的概念と関連させようとしている。この拡張を、テレス一流の勝手な推論だとみなすことにはそれなりの理由もあるだろう。しかし、その推論の過程で塗照子が水を「湿ったもの」と言い換えたのは、万有の中で水とは正反対に存在する火の出現を説明するためにした、テレス独自の補足的解釈によるものとする断定にも、それなりの理由はあるであろう。

しかし、かれのアルケオン観のわくの中において、なおかれに多くの説明の可能性がある中から、タレスの水を「熱」対「湿」の支持的関係にのみ捉えて考えさせた何かがあったとすれば、それはテレスのものではあるまい。すなわち、「タレスの水」の教説伝承またはテキストそのものの中に、

途照子にこの言い換えを許していくような思考や論述の過程ないしう勢がなかったことまでを断言できないからである。

私は、その可能性は残っていると考える。むしろ、その証言はないが、証言以上のものがあると考えからである。それは、途照子がタレスを哲学の元祖にすえた信念である。

タレス以前に水を万有の始祖とし、創造主とする信仰はあった。しかし、途照子は、水を神とする信仰はすべて、タレスの水を始源とする説の方を哲学のはじまりとしてとったのである。かれに、タレス学説を選択的に提示することをためらわせなかったものは、かれを単なる科学者にしていない直観であり、かれを単なる哲学徒に止どめない信念である。

この同一視がテキストにあったにせよ、なかったにせよ、それがタレスの発想の基底にあることが直観されたからこそ、途照子は哲学史の発端にタレスを配置したのだ、と言うことができるのではないだろうか。そして、途照子が自らの哲学史の展開のために好都合とした、この同一視は同時にまた、イオニア哲学の理論的展開のために重要な示唆、あるいは問題提起としてタレスの直接の後継者に委ねられ、受けとめられていったのではなからうか。

以上に見てきたように、タレスの水は資料的にははなはだばく然としたものである。それは存在を浮かべる水でもあれば、存在を動揺させる水でもあるという。また、他を生成・変化させる不思議な力でありながら、感覚によって知覚されるかぎりの経験物ということでもあるらしい。この矛盾はわれわれの理解を越えていよう。しかし、より確実に、そして明白に告げることができるのは、タレスの水の観念は、かれから250年も隔たるテレスにとってさえ、万有の理論的始源を考察するために不可避の、最も示唆に富む思考であったことである。そしてたぶん、タレスを最も近くで理解し親しむことができた万泥子の前には、「タレスの水」は、理論化という哲学自身の自己展開にさまざまな可能性があることを示唆しながら、知的好奇心を無限に刺激する対象として、理論的にはなお未整理だが、それゆえ生き生きとして置かれていた、ということであろう。

5 相 反 対 立 物 の 発 見

当時の先進的文明をもつエジプトやメソポタミア両地域への旅行から実用的な各種技術を摂取してミレトスに帰国したタレスの諸言動は、15歳ぐらい年下だったとされる若いマンドロをおそらく魅了しないではなかったろう。タレスは、のちにギリシア七賢人のうちに数えられたほどの人物である。その評判は、いまや下女から政治家にいたるまで、あまねく階層に聞こえている。やがて万泥子は、この天文学に長じた幾何学者の学説に親しみ、そのうちの最も難解で、しかも未解決の課題に取り組むことになった。それは「一者による宇宙支配」という、これまでギリシア人になじみのない思想であった。

「万有の始源は1つである」という命題は、万有の多様な諸現象を説明するために、それらを統一する原理として万有の根本的実体を唯一つのものに求めるものである。そしてタレスは、それを水ではないかと仮定する。たしかに、水分として宇宙に尽きることなく充たされる水には、生成変化（ゲネシス）の、寄せては返す波の循環や絶え間ない無常の流水には、動（キネーシス）の原理の資格を具えるものとして、他の何ものよりも、継起する生成と変化と運動の源泉にふさわしいものがある。

しかし、この仮定には問題がないわけではない。もしタレスの仮定どおりに、始源あるいは原理という根本的実体を占める位置に水だけが存在するとしたならば、火はどのようにして水から出てきたのか。熱い火はそもそもどうやって冷たい水から生ずることができるのか。水が火を消滅させることは一般に経験されるが、これを生成せしめているとは、一般にはとても想像できない。これはどうやって説明できるのか。

有史以来、遠い父祖から信じられ、当時なお一般に抜き難く存在する有力な水や火の観念がある。それは、呪術や魔法によって力づけられた超自然的実在であり、邪悪を払い善福を招く神聖な水や神聖な火の観念である。しかし、タレスもマンドロもこのような伝統的観念から人間の思考を解放して、何か理性的な導きによって現象の不思議を解明しようと決意した者である。しかし、当時不生不滅や不変不動など、一者を示す概念が、神の本性と不可分に考えることができなかったことを顧慮すれば、この宇宙創世説話から宇宙生成論への転換において、一者の水が神性の観念によって説明されることがあるとしても、それはやむをえないであろう。

しかしながら、始源の水が、水神・水精の地位をそのまま襲うようなことはもはや許されないことである。なぜなら、その地位は、天神ウーラノスと地神ガイアとの交合の結果であるから。あるいは、ホメロスによってゼウスの娘と言われるニンフのうちの水の精霊であり、流動する水の神オーケアノスの、また、海神ネーレウスの娘であるニンフたちである。すなわち、いずれも交合の結果であるからだ。

水が始源ならば、水は水である前に水以外の何かでありえない、という理性的信念に固執することによって、この一者の主張は、他のあらゆる宗教的観念から身を守らなければならなかったのである。そして、この理性的信念に拠り所を与えるものは、知覚の対象としての水、すなわち、「冷たく、湿った」実在としての品ものであった。とりわけ「湿っている」ことは、経験的人間にとって水についての否定できない感覚の事実そのものであり、唯一共通の認識であるとしなければならない。

タレスがなぜ水を、水以外のすべてのものの、たとえば火の、始源に選ぼうとしたのか。わたしたちは途照子とともにそれを知るすべをもたないのであるが、かれの後継者マンドロにはその理由は十分に知られていたはずである。

この理由の合理的説明の試みがタレス自身によって成功したかどうか、それはわからない。しかし、その試みがどのような形で行なわれたかを知る手がかりは、資料9の「熱そのものが湿りから発生し、また（熱は）それによって生きている」というくだりにある。これは、タレスの思考展開について途照子が伝えたわずかな示唆である。もとより「熱そのもの」がはたして火を、「湿り」が水そのものを指すかどうか不明である。しかし、途照子がタレス学説の概要説明に使った「熱」や「湿り」は、外でもない万泥子の用語ではなかったか。途照子が哲学史の叙述で、明白な概念の用意がないタレスの問いに答えるために万泥子からの照合を必要としたことは考えられないことではないだろう。

では、タレスが提起し、マンドロが負うことになった、その課題はどんな形をとるものであったか。

ここで、なおも文献学的確実さに拘わって考えていくことにすれば、それは、すべては水から発生し、水（が有する諸性質）とは相反対立する（諸性質をもつようなもの、たとえば）火でさえも水から生じ、それによって保持されているのではないか、という課題になるだろう。そして、これに答えていくにはもはや単なる観察者や記述者に留まり続けていてはできないだろう。なぜなら「水から火が生じる」ことはとうてい常識を納得させるものでないし、この背理に対して反論の生じるのは火を見るよりも明らかであり、当然これに反ばくする論争のために「理論」武装が必要になってくるからだ。

だから、タレスの問題提起に答えて立ったことは、同時にこの論争を引き受けて立つことであった。かくして、マンドロ自身のなすべき仕事は、始源の実体を求めることのほかに、説明のための用語の整備と、それを正しく使用していくことであった。正しい用語法は思考が誤りに陥ることを防ぎ、思考が厳密に進められていくことに役立つだろう。用語の正確な適用によってタレスの仮説を読み直し、理論的に整備して行けば、始源の実体は理論的に見出されてくることだろう。

ことがらを学問的に説明することを、ギリシア語で「ロゴス・テイドナイ」と言う。これを文字通りに訳せば「ことばを与えること」となる。その「ことば」とは、説明を求められている不可解な経験を直接指示する個別的なことばとは別のことばでなければなるまい。しかし、それは別の経験を示す特殊なことばではない。異なる経験に立ちながら、それらの経験の特殊性や個別性を離れ、これを越えて一致点に集中するための知的努力によって作られることばである。すなわち、ロゴスは、何らかの知的な吟味を受け、知的操作を行なうために用いられようとすることばである。

したがって、「ロゴス・テイドナイ」とは、ことがらの訳を述べること、すなわち筋道の立つ「論理を与えること」によって理解をもたらすことである。そのことがらから続いて何が次に起こるかを予知するために、そのことがらがそうあるのは何によってであるかを問うてゆくこと、言い換えれば、そのことがらをどんな因果系列の中に置いてみることができるかを尋ねてゆくことであ

る。よって、それはヒストリア（探究）に応じるものである。この要請に応えるには、ことばは直接的な経験そのものを指示できる明解さとは別種の、現象過程の連続や展開の必然性または可能性を示して思考を導く明確さを持つものでなければならない。

タレスの「水」はそのようなことばとして適格であったか。

経験によって得られる水の知識とは、たとえば、降る雨、昇る霧であり、流れる川、拡がる海のものである。すなわち垂直方向へ拡散する水であり、水平方向へ拡張する水である。あるいは、しみこむ水、しみ出る水である。また、ものを浮べる水、沈める水である。その他、飲む水、洗う水、浴びる水、流す水、導める水、溶かす水などである。それは日常的関心と経験の内にある水である。そして人間的尺度で観測され、実用的な目的のために意味を与えられ価値づけられてゆく水である。タレスの水の概念がこのような水の知識に基づくものであったことは、前節で述べた。

しかし、もし水が原理（始源）として考えられるのなら、それはすべての存在の原因となる水のことであるから、これら経験的な水のどれか1つに留ることはないだろう。原理の水は、経験の本質である個別性や特殊性とは無関係であり、むしろ経験を越えて、その存在であり続ける原因となる本性を指示することによって記述されるものでなければならない。これが求める説明の用語であり、因果関係を明確にしてゆく論理の要素となる「物」である。そして、この「物」の発見はタレスにおいてはいまだ行なわれえず、万泥子をまわって、かれによってはたされることになる。

万泥子は、この原因を指示する水を、かれ自身の宇宙観察に基づいて得られた経験的知識を知情的反省の吟味にかけることにより、ある明らかな方向づけのもとで性格づけた。水が変化するとは、水が水自身に留まることをやめて、水でない別のものになることである。これは、水自身であることのほかに何か別のものが加わるのではなく、水が水として存在すること自身を否定する反対的なものが水の周辺に対立して生じ、水を侵してその内へと及んでいくことである。すなわち、万泥子は考える。水が水自身であり続けることは、水がそれ自体（品）を保つもの、つまり界（ペラス）をもつことである。反対に、水自身で（あるいは水自身が）なくなることは、水がそれ自身（品）を保っている物とは正反対の物を受け容れて、水の存在を示す界を失っていくことである。

自然界において水の存在を失わしめる現象は乾燥であり、ひでりである。「乾いたもの」の作用である蒸発によって、水は界を失い、水自身であることができなくなる、すなわち、水が水自身であり続けるのは、それが支える力をもち、動かす力をもち、さらに生成させる作用をもつことによるのではなく、それがただ「湿ったもの」であることによる。これが水が水であることの原因であり、特性である。そして、これはまた水が他に及ぼすことのできる主要な働きである「湿らせる」作用をもつ理由である。

万泥子の答は、水が万有の始源または原理ではないという、タレス仮説には否定的なものであった。しかし、かれはそれをタレスの「単一原理」論の適用によって導いたのである。これによ

て水は始源（原理）の座を明け渡すことになったが、これをタレス的なものの否定と見るのは皮相的である。なぜなら、たとえば、次のように考えるとき、万泥子によるタレスの継承はむしろいっそう顕著であると言えるからである。すなわち、ギリシア人の間では古くから「同じものは同じものによって知られる」という、認識一般における共通観念が根強く存在して、宇宙や社会や人間の理解を支配し制約し、これが思想の解放と進歩とを阻んでいた。これに対して、タレスはあえて「水によって火を知る」ことを提起して、この解放に着手し、マンドロはさらに「相反対立するものによって相互を知る」ことを一般化することで、タレスの意図を一段と押し進めていったと見ることができるからである。

さて、タレスの水に代わって、万泥子が提出した「相反対立性をもつもの」のうち、宇宙生成において主要なものは4つであることを資料4は述べている。そして、それらが2対の相反対立するもの、「熱いもの」と「冷たいもの」、「乾いたもの」と「湿ったもの」であることを、同じ証言者は資料5で伝えている。これらは、万有の生成や動や変化の諸現象を生起する「原因となる性質」として理論上（説明の必要から）仮定されたのである。しかしながら、これら相反対立物はまた、水や火を「構成する成分」としてその存在が理論的に考案され、要請されているものである。

万泥子は、この仮説に基づいて実際に宇宙の生成や動・変化を観察し直していったことが、資料4のわずかな記述のうちにかがうことができる。それを次に再掲しておこう。

かれ（万泥子）が4つの要素の入り混って起こる変化を観察して、それらのうち、どれかある1つを基本とするのではなく、それらの外の別のものを設定するのが相応である、と考えたことはまちがいない。そして、かれは生成を、要素が変化することによってでなく、相反対立するものが恒久運動により分離し出されることによって、示したのである。

かれは、宇宙万有の雑多な多様性を統一かつ整合的に理解していくために、水は永久不変たりえず、したがって始源（原理）となりえない品ものであること、それは相反対立物によって合成されて生ずることを示そうとした。そして、この相反対立物の発見によって、宇宙生成説はようやく説話的性格を脱し、自らの理論化を可能にすることになった。この、事物を相反対立の関係によってとらえようとする傾向は、以後の学問の方法に大きな影響を与えたのである。

また、万泥子は、だれも経験したことのない「宇宙生成のはじまり」から説き起こしていくという方法はとらず、目前の宇宙自然の観察から出発しようとする。現実に見ることのできるのは、既に生成してしまった宇宙の変化現象でしかない。そこにかれは思考の起点を置いているように思われる。現象は相異なる「多」の出現であり、それは変化や動によって起る。この原因の説明から超脱的に原初の一者は推定されるものでなければならぬ。そして、この説明は観察者として経験的事実を積み上げながら、これに知的反省を加えることによってはたされる。その知的反省は、

「相反対立物」の存在を仮定し、これによって宇宙の生成を秩序づけ、あるいは部分はずべて相互関連をもつものとして全体を整合的に理解しようとする方法である。

資料4は、この知的反省のために万泥子が立てた独自の観点を含んでいる。それは次のようにまとめることができるだろう。

- (1) 相反対立する「もの」が存在して、それらが変化の前提となっている。そして、そのうちの4つが基本となる世界の素性(組成)であると前提する。
- (2) 宇宙形成は、これら4つの基本素性のそれぞれ独立した個別の変態や変質ではなく、これらの「もの」が運動分子となって相互的に侵入混合する関連によって起こる、と仮定して説明しようとする。
- (3) さらに、諸素性の複雑な相互関与の説明に当って周期や循環という時間観念と分離や結集という空間観念を用いて宇宙形成のモデルを作ろうとする。
- (4) つけ加えて言えば、万泥子は、原初の宇宙形成に関して相反対立物「の外に別のもの」を設定し、このものから相反対立物が分離することを「生成」と呼んでいることがわかる。この「別のもの」については後節で扱うが、厳密に言えば、生成とはこのものからの発生をいうのである。いったん生成した相反対立物が、相互侵入と混合のあと、再び分離が起こり相反対立物が発現しても、それは変化であって生成ではない。すなわち、生成とは単に相反対立物の出現を言うのではない。このように生成と変化とを万泥子は区別して考えていることがわかる。もちろん、最初の生成ののちに最初の変化は起こる。しかしそれ以後は、生成は無限に、変化は不断に継起し、くり返されるのであるから、両者は現宇宙空間において共時的に現象する、と見るのである。

この観点に見られるような、経験や観察によって与えられた事実や結果をそのまま誌し留めるだけに満足せず、それらを何らかの知的反省にかけて吟味した上で用いようとする態度を、「理論的」ということばで呼ぶことができるならば、この、シムプリが伝えるところの、テオブラの要約になるマンドロ伝承と、テレスによるマンドロ伝承において、わたしたちは宇宙の「生成」に関する最初の学説、ないし理論的説明に出合うことになる、ということができよう。

かくして、マンドロは、タレスの問題を受け継いで万有を変化過程の中でとらえ、そこに何らかの知的操作を加えてこれらを原理的に説明することを試みた。その結果、彼は水の原理性を主張した師タレスの説を覆すことになった。しかし、このことはかえって彼をして、「湿ったもの」を実体的な水から引き離し、これを相対化して取り扱うことを可能にさせた。ということは、「湿ったもの」が「乾いたもの」とともに理論的に新たに発見されたのである。

この「湿ったもの」は、「乾いたもの」と相反対立して互いに生成変化の素因となる。両者のうちの一方は他方によって相互的に規定される。そういう関係において存在するという、全く新し

い型の存在形式、ないし説明方式の発明とともに、この相反対立物の発見は、万泥子のギリシア科学への重要な貢献であろう。

(未完)

<編集局から>

この論文はまだまだ続きます。実はすでに全文の原稿はいただいてしまったのですが、全部載せるとこの号はそれだけでおしまいになります。それでもよいわけですが、「学問」に熱心であるとはお義理にも言えそうにない本会の会員諸氏のことを考えて、著者の了解を得て、分割掲載することにしました。ときには、真面目で論理的な論文もじっくりとお読み下さい。なお、次号以下の「目次」を参考のために載せておきます。

- 6 ト・アペイロン —— 無限定なものという限定
- 7 「正しさ」という必然 —— 現存する唯一の言葉
- 8 宇宙の形成に関するマンドロ発言の伝承
- 9 大地宇宙の形成

京都薄情

———日本動物行動学会第二回大会異聞

阿波 六吉

あの人の姿 懐かしい
黄昏の 河原町
恋は
恋は 弱い女を
どうして泣かせるの
苦しめないで
ああ 責めないで
別れの辛さ 知りながら
あの人の言葉 思い出す
夕焼けの 高瀬川

修学旅行以来、実に十年振りに京の街に向う私の胸の中に去来する詞は、チェリッシュの「なのにあなたは京都に行くの」でもなければ、かの歌声運動の残拍を発酵蒸留させたあの「京都大原三千院………」でもなく、1970年、ベンチャーズの調べに乗った、かの渚ゆう子の「京都慕情」であった。関八州から足を踏み出すこと、異国に赴くが如く承知している私にとって京都の街は、黄昏の中に映る懐み深いネオン、その下を流れ往く無口な後ろ姿と高瀬川。まさに京都慕情に目のくらんでいた私の妄想は、京都駅に降り立った一瞬の内に予想だにせぬ横槍に一気に突き崩されることとなった。

ああ、東京で平和に週刊宝石を読んでいた頃には、なんでこんなことが想像しえようか。はたして、京都の後ろ姿はけっして無口ではなかったのである。京都では、駅員から女子大生まで皆関西弁をしゃべっているのである。

なにを馬鹿なことを、とおっしゃるむきもあろうが、やはりこの風情はお初に拝見する者には一寸した驚きである。週刊宝石のグラビアの「処女探し」を見るにつけ、京都といえどもいやしくも女子大生の口から「ちゃうねん」などという語が出て来ようとは、神ならぬ身のこの私には思いもよらぬことであった。

そんな、話が違ふ———と声にもならずよどませつつ、今想い反せばケチの付き初めであった京都駅をあとに、市内を南北に貫く地下鉄に乗り、一路北へと向ったのは、曇天の下、冷たい風吹く師走の昼下がりであった。

遠い日の愛の 残り火が
燃えてる嵐山
すべて
すべて 貴方のことが
どうして消せないの
苦しめないで
ああ 責めないで
別れの辛さ知りながら
遠い日は二度と 帰らない
夕闇の 東山

どうせ 毎夜毎夜飲み歩くことを見越して、河原町あたりに宿をとる決意を固めた私は、早や心は夜の木屋町のネオンの下をうろつきつつも、その身は黄昏の京都大学理学部、日本動物行動学会第二回大会会場のポスターセッションの真直中であつた。どのような経緯で日本動物行動学会設立と成つたかは、寡聞にして定かではない。一応心得ていることとしては、1982年12月9日に「行動について十分に討論できる学会」なるものを作ろうということで出来たということ、日高敏隆氏が会長をなすつていているということ、若いのは中学生まではいっているという幅の広い学会であるということ、さらに、動物行動学という学問が主に関西において盛んであるため、特に京都大学の人脈が活躍しているらしいということ、ぐらゐのものである。日頃、既成の学会の流れとは異なつたものを作つてゐる京都の生物学にミーハー的な憧れを懐き、さらには京都慕情に目のくらんでゐた私としては、京都の人々の牛耳るこの若々しい学会こそ、既成の動物学の価値観にとらわれぬ新しいパラダイムの生まれうる場として大いに期待するところであつた。

ポスターセッションは期待に違ふわず（とは言ふものの浅学非才の身としては、前もつて何ひとつ具体的イメージの湧かぬものではあつたが、）精なるもの粗なるもの様々で、なるほどこんな所なくては拝見できぬ発表ばかりだと感嘆したものであつた。また、若い学会らしく、お決まりの背広ネクタイ姿はあまり見られず、中にはジョギングのついでに参加しているような服装も見受けられ、なるほど京都大学は凄いと、インタントコーヒーをすすりながら、減多やたらに感心してゐた。

さて、大会の催しはポスターセッションの他にもフィルムセッションやラウンドテーブルといったものがあつたが、英語音痴の私には恥ずかしながらこのラウンドテーブルなるものが何のことであるのか分からなかつた。もう12月の陽はとっくに暮れた頃合、頭の

中がきらめくネオンで一杯になっていたが、相棒に誘われるままにラウンドテーブルなるものの会場である会議室へと向った。

私達が着いた頃には狭い会議室は満員御礼となり、これがいわゆるひとつの若い熱気に溢れたというやつかと、相変わらず独り感心していた。上座には日高会長、遅れて入ってきた若手のホープ城田某氏は上座近くの空いた席へ、そして、本誌でも度々御登場の伊藤嘉昭氏は城田氏とは対をなす一隅に着席。いよいよ始まろうとする議場の配置を見回して初て私はラウンドテーブルが円卓会議の事であることが分かった。

議題は第一回ラウンドテーブルにて（私達の見聞したラウンドテーブルは二回目であった）日高某氏が「今、なぜEthologyか？」とのテーマで話されたことについての討議であった。第一回を聴いていないので、その後の議論の流れから推察するしかないが、——ともかく動物をよく観よう——ということなのだそうだ。

議論はとりあえずとっかかりを作ろうということで城田某氏からの反論という形をとって始められた。いはく——今、世界の動物行動学の趨勢は適応戦略理論等の行動の定量的解析に向けられている。日高氏の言はこの動きに逆行するものであり、昔の枚挙生物学への後退を招きかねないものではないのか——と。これに対して日高氏らの反論は——適応戦略理論という色眼鏡で動物の行動を観るのも結構だが、他の色眼鏡を持つことも多様性という点でも、今後の発展にとっても大事である——と応える。

当初は、ふたつの論、つまり——適応戦略理論というパラダイムが世界の主流を占めている以上、それに乗り遅れることなく共通の土台としていくのが、外国に後れをとらぬためにも（正直言ってこの言葉を聞いた時から嫌な予感がし始めた）必要である——という派と——各個人が良く良く動物を観ることから、他にも可能性のあるパラダイムが生み出されることになるのだ——という側との間の討論であった。後者の方がやや分が悪く、特に“世界に後れる”とか“評価されない”と言った前者の殺し文句には、苦戦していた。途中から小原某氏が加わり両方の中を取りもつ様な方向へと持って行こうとして、いはく——色々な見方で迫るのも良いが今回の発表を含め行動学の研究の中には、きちんとした定義付けや定量化が出来ていないものが少なからず見られる——と。やがて誰からともなく、行動学をやっている研究者の就職条件の劣悪さが話題に登ると、そうした諸悪の根源として、攻撃の矛先が動物学会を牛耳る東大（この点を伊藤嘉昭氏は強調していた）と共に、そうした“しっかりとしていない研究”に向いてきた。即ち、何故動物行動学が他の生物学の中において、自然科学としての市民権を得られないのかと言うことが話題となり、その原因として、外に於いては動物行動学の価値を認めない既成の権威が、内には行動学の権威の向上に足引っぱりとなる素人臭い研究があるということになり始めたのである

。外の敵については、伊藤嘉昭氏の「東大が悪い」という言と、日高氏の「動物学会だと行動の部門の発表は、冷遇されてて……」ということで議論は尽くされていたようだったが、内なる敵、即ち枚挙生物学的な研究や、「主観的記述」を含むもの等の、世間から「動物行動学は素人でもできる」との“誤解”を生み出すおそれのある事象一般については、続々と糾弾の声が上がり、“適応戦略派”の独壇場となっていた。一方“良く親よう派”の側は、まとまった形での反論はだせず、“非科学的な精神主義”として取られがちであった。

やがて、時間も押し詰まった頃、「今日の討論をまとめる意味で……」と若き研究者のひとりが言った。「我々は素人には使いこなせないような高度の理論を身につけること」が必要であると。

こうして間口の広さを誇っていた日本動物行動学会から、足手まといの素人は閉め出しを喰うこととなった。

データの処理が甘い、定量化ができていない、主観的すぎる……自分達が悪口を言っている既成の権威と同じ基盤からの批判を下のものに下すこの人達は、なんのためにわざわざ新しい学会をあつらえたのであろうか。動物学会の中での冷遇を嘆き、それが嫌だから飛び出したという日高氏の正直な発言が物語っているのかもしれない。既成の権威の中で評価されないことに不満を懐き家出したのまでは良いが、新たな権威を自分達で作ろうということになりつつあるらしい。

愚鈍な私は、帰りのバスの中でそんなことを考えはじめた。

自分の学問が他の分野に較べて見劣りがすることへの不満をもって研究の原動力とする、まさにあの生態学会を毒した“伊藤嘉症”がここでも流行しているのだろうか。

ラウンドテーブルの中では、ネオ・ダーウィニズムにもとづく適応戦略理論そのものへの批判は逐に出なかった。現在、ネオ・ダーウィニズム自体への疑義がもたれ、特に、今西錦司氏をかかえる京都に於いてはそうした議論を期待できるはずであった。しかし、適応戦略理論という定量的解析の方法は、行動学が自然科学の仲間入りをできるための大切な片道切符なのである。それを根底からむしかえすような論議はもとより彼等の意図するところではないのであろう。

また、行動学そのもののもつ危険性、特に人間管理の手段として使われるおそれについても私の知る限りでは触れられなかった。実際、動物行動学を研究するには並行して生命倫理学とでもいうべき研究が進行して行く必要性はしばしば説かれており、もし具体的な話が出るとしたらこの学会でと期待していたのだが、考えて見れば、自然科学として認められたがっている時に、そんな人文科学のような真似はいやがられるのかもしれない。

動物学会の行動部門では見られないものを期待していた私の見たものは、やっと自然科学としての権威が認められるつてを得て期待に胸ふくらませ、また期待を実現すべく若者を激励する群像と、それに張り切る近代合理主義の落し子達であり、やがては、近代合理主義を根底から揺さ振ることを私かに期待していた動物行動学が、彼等に手綱を引かれていく姿であった。

苦しめないで
ああ 責めないで
別れの辛さ 知りながら
遠い日は 二度と帰らない
夕闇の 桂川

木屋町の学生向けの呑み屋の中で私は後悔した。

店の中が、賑やかなのである。

否、ただ賑やかなだけなのではない。あの関西弁で低い天井まで一杯なのである。

「東京弁使うんは、キザったらしくてきらいや。」

と五年前に私に語った少女の言葉を思い出し、相棒がいながらも無口になっている私は、東京に来てから無口になったという東北からの転校生の気持が良く分かった。

そして

「箱根の関っから向こうにゃ、まともな魚が泳いでないってんだがねえ」

と言う足利弁の祖母の言葉を想い浮かべた。

<文献>

- 青木 清：行動の生物学（1）．遺伝，37（1），105-109（1983）
柴谷 篤弘：社会生物学・分子生物学・進化．科学，54，54（1984）
日高 敏隆：日本動物行動学会の発足．自然，38（2），16（1983）
松本 郁夫：生態学者の精神分析．日本生物学会誌，454-457（1982）
松本 郁夫：生態学者の実存分析．日本生物学会誌，505-515（1983）
生物の社会行動と適応戦略．科学，53，549-570（1983）

例 外 人 生 (1)

不 名 誉 教 授

生物学ではどんな法則でも決して絶対ではない。必ず例外が現れてくる。メンデルの法則も、彼自身は法則なんておこがましい形式で発表したのではない。結局失意のうちに死んでいったわけだが、なまじっか法則といわなかったところがよい。ところがその後、エライ人達が3つの法則とか、4つの法則とか、いや1つでよいといっているうちに、一方では非メンデル式遺伝が公になった。これとて真の非メンデル式遺伝は細胞質遺伝ただ1つだ、なんていろいろ言い訳が出る始末である。

私はこの生物学的プリンシプルが私の天性に影響するほど生物学に打ち込んだ自信はないが、何か絶対的な態度で臨まれるとつい一言いいたくなる程妙に反発を感じる。“これは法則のようなものだから納得すべきだ”と言われても、どこかに例外があると思うようようになる。この性質はやっぱり私が生物学に進んだからというより、私の生まれつきといった方がよさそうである。私は母のおなかの中に9ヶ月しか厄介にならず、しかも生まれるとき足から先に出てきたものだから、今でも何かにつけて足を出し、逆方向に行きたがるのはこんなところにあると思っている。まだ保育器のない古い時代によくも生き延びられたのは、これも例外の1つであろう。

元来、私は金沢市近郊の小さな田舎の町医者の子として生れた。今でも医者はわが子を医者にしたがる傾向があるように、父も私を医者にしようと小さいときから決めていた。しかし次第に大きくなると、例の性癖からか、どうしても医者がきらいで仕方がなかった。父は非常に厳格で、自分は山家育ちで水泳が出来なかったせい私には絶対に泳ぎに行かせなかった。たまたまこっそりと近くの大川へ泳ぎに行くと、往診から帰ってきた父は私に足の裏を見せろという。恐る恐る足の裏を出すと、キレイになっているものだから泳ぎに行ったことは直ぐバレてしまう。泳いだあと足の裏に土をつけて帰っても、今つけた土と自然の汚れとではすぐに区別はつく。さらに父は私に自転車をどうしても習わしてくれなかった。そのころは今のようの子供用の自転車なんて、見たくてもなかった。みんな大人用の自転車で、あの三角形になったところへ足をつっこんで練習したものだ。後日、戦中戦後のヤミの買い出しに自転車に乗れない程困ったことはなく、結局、大人になってから恥をしのんで練習したが、ハンドルの切り方はいつまでも下手である。しかし、父

のこのような強圧下でも私のどこかにはそれをひそかに逃れる方法を恐れ気もなくやっつけてのける図太さがあったらしい。小学校の4、5年のころ、学校での手工か何かのときだったか、詳しいことはもう忘れたが、とに角クラス全員1人づつハンカチ大のガーゼを持ってくるように言われたことがある。しかし、どの家にもガーゼがあるわけでもなし、買いに行ってもハンカチ大のガーゼでは売ってくれそうにない。そこで私は子供ながら一計を案じ、クラス全体のガーゼを私が有償でひきうけることにした。私は前からハーモニカが欲しくて仕様がなかった。母に言うと、父が許さないからだめだという。商品のガーゼは当然自宅の診察室から無断で流用したもので、値段は忘れたがハーモニカに変わったことはもちろんである。家では吹けないものだから裏の田んぼで吹いたとき、その音が胸の底にしみわたってうっとりとした。後で看護婦がガーゼの紛失に戸迷ったようだが、最後まで私は黙っていた。私には人の知らない商魂があったとみえる。今思えば父の教育は、事なかれ主義がこうじて子供の抑圧主義にまで発展したものらしいが、特別に父に恨みを抱くこともなく面と向って反抗することもなく育った。それは、私は当時特に小さく、クラスでも一番前で体格もひ弱であって、そのような元気がなかったのか、いや、その外に理由があるとすれば次のような事件のためだと思う。

やはり4、5年のころ、修身の時間に先生が教科書以外のことで、おそらく何か他の本を読んで感動したのだと思うが、「大我」と「小我」という題で2日余にわたって話をした。詳しいことは忘れたが今から考えると、前者は大体大義とシノニムで滅私奉公とか忠義のためには我身を捨てるような精神をいい、後者はそれに対照的で利己的で大義を考えない精神というのであろう。子供心には意味のわかったようなわからないような気持ちで、先生の熱心な話とうらはらにいやいやながら退屈な思いで聞いていた記憶がある。これが試験に出るといわれたとき、教室のポスの存在の1人が、白紙を出すかそれとも関係のない別のことを書いて出そうと、勝手に決めてしまった。私はそれを忠実に守ろうと思った。案の定、「小我（ショウガ）」という題で試験に出た。答案には、ショウガとは八百屋にあってオロシ金でおろして食べると辛いものだ、という風に書いた。このような馬鹿な答案を書いたのは、あんな申し合せがあったにもかかわらず私1人であつたらしい。先生は怒るとともに困ったようである。古い時代の小さな町の医者という和一応名士になっていたから、親を呼び出すのにちゅうちよしたようで、私は父あての封書を持たされて帰ってきた。結局母は謝りに行ったようだが、これに対して父は私に一言も言わずそんなそぶりさえも見せなかった。あの厳格な父が黙っているのは気味悪かったが、父と子、それよりも男同志の腹と腹との了解というものを感じたようだ。それ以来私は益々父に頭が上らなくなった。

後年旧制高校に入って（それより以前から吸っていたが）堂々と人前で煙草を吸っていたが、酒も煙草もだめな父の前では父が死ぬまで吸えなかった。こんな調子だから、私の性癖といえども父には真向から対決するようなことはできなかった。これは、私が最初に述べた言葉に反するよう

だが、これも例外の1つにしておいてもらいたい。

中学時代、私の町と金沢の間は今日ほど交通が便利でなかったので、寄宿舎に入れられた。厳格な父の眼を逃れることはできたけれども、上級生がいたので善悪交々私を規制しひっぱっていった。私にオタマジャクシの読み方とマンダリンを教えてくれたある上級生は印象深い。しかし他面3年生の中ごろから強制的に吸わされた煙草に私はやみつきになってしまったが、土曜から日曜にかけて家に帰った時は絶体に吸えなかった。学校ではかくれて吸ったが、1度みつかると嚴重注意、2度目は親が呼ばれ、3度目は停学になるならわしであった。煙草があの父に知らされ、しかも金沢の学校まで呼ばれてはたまらないと思ったので、喫煙には大変気を配った。4年生のある夏、体操の時間に珍しく洋服のポケット検査があった。もちろん煙草の検査で、ポケットの中に粉の1つでもあれば摘発されるのである。こんな調べ方は今までなかったので私の顔は青くなった。しかもその上、その時私は級長をしていて、級長が煙草であけられては面目丸つぶれである。私はこのポケット検査の手伝いまでさせられるはめに落入了。一同終って最後に私だけ残った時、体操の先生——この先生は軍人上りで、時々とんちんかんなことを言うので、“馬鹿中尉”略して馬鹿中といわれていた——この馬鹿中先生は、“君は大丈夫だろうが一応調べる”と言って私の洋服を脱がせた。私は非常に恐れたが無事だった。これは馬鹿中先生が私を見逃してくれたのでなくて、後から気付いたことだが、前日の日曜日に母が洋服を洗っておいてくれたのであった。この時、これ程母を有りがたく思ったことはなかった。

この馬鹿中先生について今でも忘れ得ないエピソードがある。当時大正の末期で、大正天皇の病状が最悪となり、全生徒が講堂に集って病氣平ゆの祈願をすることになった。この時一同に号令をかけたのがこの馬鹿中先生であった。先ず金沢から東方の東京の方へ全員を向けさせ、“黙トウ”と号令をかけた。次に南方の伊勢神宮の方向へ向けさせ、“黙ナン”と大声で号令をかけた。言うまでもなく、最初の黙トウは東へ向って祈るからであり、南方なら黙ナンになると思ったにちがいない。

4年になると勉強があるというので金沢に下宿した。父に言わせば医大へ行くための勉強である。この時期から成績は、井戸掘りといわれるほど下るばかりであった。ただ生物だけは好意が持てた。物理、化学のように法則とか定理とかいうものがなかったから。それともう一つ、子供のころから家にある顕微鏡で池の水とか花粉を見たりしたものだが、そんなに組織的にやっていたわけではない。しかし、蝶やトンボを集めるために山野をかけ回ることはどうも苦手であった。それだったら生物学と近縁の医者に好意をもってよいはずだが、当時は医学にも基礎医学があって病人とほとんど付き合わない方面のあることは知らず、医者といえは病人を診るものとばかり思っていた。その外にも、父は死ぬ10数年前から身体を悪くして、特に夜中の往診には大変不気げんで時には居留守も使っていたので、私はこれが一番いやであった。

父は現在の京都府立医大の前身、府立医専の出身だったらしい。そのため府立医大の予科を受験するよう命令した。医大へ入ったら万事休す、それと私の学力の低かったのとて、浪人生活に入ったが、父はなかなかあきらめなかった。いつまでも浪人というわけにもいかない、ここでまたひそかに反旗をひるがえして、府立医大受験ということで京都へ行き、予め願書を出しておいた山陰の旧制高校を受けるべく京都駅から山陰線に乗った。京都には私の叔父がいて、父には知らせないように了解をとっておいた。この叔父は大変人が好いので私は好きだったが、父は不肖の弟と思っていたようである。この叔父も父と前後して死んでしまった。受験後は家へ帰らず遊び回っていたら、「スグカエレ チチ」の電報が来た。恐る恐る父の前に出ると、高校合格の通知が来ていたのである。高校では不本意であるが医大へ行く道があるから3年間の猶予ということでケリがついた。

山陰での3年間は、私の青春そのものであった。前にも書いたように、多少手がけたマンドリンとまだ下手なバイオリンの経験から音楽部に入った。この時期は私として最も音楽に親しんだ思い出の深いものであり、また、このことが将来ある事件のきっかけを与えることになったとは、もちろんそのときは知らない。

高校へ入って第一に珍しく思ったことは独乙（ドイツ）語であった。独乙人のカーリッシュという先生が先ず教室へ入ってくるなり、外を指さしてダス・フエンスターと何度も言ったが、それが窓であることを理解するまで、私には時間がかかった。他に文法の先生と講読の先生が日本人であった。文法はA B Cの発音から冠詞の変化まで進むのに時間がかかった。その間に他方では講読が続けられ、マーヤというハチの子供が独りで初めて外界へ出ていろいろな経験をするという物語であるが、文法もろくろく知らないのに1時間に2ページ、ときには3ページも進んだ。この先生は、今でも名前は覚えているが、あだ名はマーヤとつけた。非常に点の辛い先生で、しかも自分が訳した通りに答案を書かないと点をくれないといううわさがあった。私は、この自分の訳通りというのが、独乙語もできないくせに、気にさわった。入学後最初の試験が近づくと、この厄介な独乙語の試験が話題になった。結局講読の試験は、未だ文法もはっきりしないときなんだから、文法の教科書に例題としてあるような簡単な短い文か単語あたりが出るのではないかという予想だった。私はこの予想を確信することにした。実際の試験は大変長文のもので、単語を知っていただけでは先生の訳通りになかなか書けなかった。成績は最悪の30点。学年末の平均で、30点が1つあるか、40点が1つに50点が1つあるときと、50点が3つある場合は、必ず落第に決っていた。この講読を40点、50点に上げるのにその後苦労した。結局、最初皆が希望的に考えた出題傾向をそのまま信じて決行したことは、すでに遠い過去の小学校時代のショウカの問題を思い出し、私の付和雷同は結局私1人の付和雷同に終わったようで、これまた生れつき足を出す性癖を發揮してしまった。

もう一つの思い出は、私に似合わず足も出さず例外にもならず、私には珠玉のようなロマンであった。強いていえば、いつもの習性に似合わなかったのが例外であったといえようか。

高校2年の秋、私と友人3人総勢4人で、空道湖に注ぐ基の川に沿って徒歩で湖上することにした。この河の沿岸には、もうほとんど忘れたが、日本の神話時代の物語に関係した遺跡と名づけられるものがいろいろあったからである。例えば、スサノオノ命が八岐の蛇（おろち）を退治したところといったようなものである。上流へ行くほど奇岩奇石があって山は深くなるばかりで、神話の国へ入っていくようであった。話しながら夢中で歩いていくうちに道がなくなって、全く中国山脈の山中へ迷いこんでしまった。4人でいろいろ歩いてきた記憶をたどりながら道を探しているうちに、秋の日は暮れ易くだんだん暗くなりかけてしまった。少し小高く視界のきくところへ出たので四方を見渡すと、遠くの方に燈火が樹々の間から見えた。一同歓声をあげてその燈火をめがけて歩きだした。やがてその燈火に通ずる道に出た。しばらくしてある家の前に行きつくと、驚く程大きな門構えに行き当たった。こんな深い山の中にこんな大きな家があるうとは想像もつかなかった。桃太郎が鬼退治に行った鬼の館の門であろうか、全く幻の城のように思えた。

通用門を恐る恐る開けて中へ入ると、格子のはまった長屋みたいな家が長く続き、その端に一段と大きい家があったので、その玄関の前に立って案内を乞うた。人が出てきて中へ入ると、帳場のような構えがあって、数人の着物に前掛をした人がいた。この土地の高校生だが道に迷ってしまったので一夜の宿をお願いしたいと頼みこむと、帳場の中の頭らしい人が出てきて、“ただ今御主人は東京へお出ましますが、奥様にうかがってくるから少々お待ちを”と言われ、ずい分長く待たされた。奥様のお許しが出たというので、その大きな家の二階の床の間のある部屋へ通された。しばらくすると執事なる人が来て、食事ができるまで話し合手になってくれた。ここの主人は I 氏とって山陰随一といわれるほどの素封家で、いま貴族院議員であるため上京中とのこと、当時の貴族院は現在の参議院に相当してはいるが、選挙でなるのではなく、当時の華族、富豪、有識者が政府から推選されてなるのである。子供が小学校へ行く時、遠いので毎日人力車で下にある村へ通うのに、自分の所有地以外を通らないという程の大地主だそうである。家族はわれわれが現在いる家とは離れた別むねにいるとのことであった。夜だったのでそこらあたりを見て回るわけにいかなかったが、こんな山奥にこんな大きな屋敷があるとは、更めて驚きというか不思議というか、一同わけがわからない気持であった。私はこんな話をボンヤリ聞きながら、中学時代に読んだ鈴木三重吉の小説の中にあるような気がしていた。最近、“絶唱”という題で、山番の娘とその主人の息子との恋愛をアツクったテレビドラマが何回か、ヒロイン・ヒーローを変えて放映されたが、それを見るたびにこの山の I 氏の館を思い出す。

やがて食事が運ばれてきた。お酒もついでいた。山家に似合わないごちそうであった。それよりも、食事を運んできて給仕をしてくれた16、7才の女の子の可愛く美人であるのに、また驚い

た。身なりは質素なものであったが、ひなには希なという言葉もつきなみてしかなかった。一同硬くなって話しかけることもろくに出来ず、この下の村の娘であることがやっとわかったくらいであった。一同その部屋で眠ることになったが、いろいろの思いでなかなか寝つかれなかった。

翌朝滞ることになると弁当の握り飯まで持たしてくれたが、最後のあいさつをして別れるときにとうとう例の娘さんの顔は見えなかった。学校へ帰ってから後もこの娘さんのことが思い出され、もう一度行ってみたい衝動にかられたが、それから後今まで一度も行ったことはない。

高校時代の思い出はいろいろあって、全国の高校の中で一番長い3週間余のストライキをやった際にカンズメになっている間にマーシャンを覚えたこと、スト中に抜け出して玉造温泉で金が不足して困った友人を救うために出かけミイラとりがミイラになったことなどが、印象深く覚えている。

3年間は夢のように過ぎ、高校時代最後の卒業試験の時、後でわかったことだが、平素体の弱かった父が患者からの腸チフスに感染して危篤状態になっていたのだが、父の遺言で私には知らされなかった。そのころの旧制高校では、どんな理由があっても試験を休めば追試なんてなくて、落第に決っていたからである。虫の知らせかそのころ私の体調も悪く、ようやくの思いで試験が終了するとき、父の死が知らされた。家の玄関へつくなり、その場で崩れるように倒れてしまった。そのとき、父の医院を借りて開業することになっていた若い医師は、胸が少し悪いところへ心労が加わったものだから栄養をとって休養していたらよくなるだろうというので、うまいものを食べて寝ているうちに、どうも体がだるくて元気がなくなる一方になった。そのうちトイレにいくと血尿が出たので驚いた。結核性のジン臓炎ではないかというので、大学病院で検査をしてもらっている一週間というものは、まるで死刑台の罪人のような気持だった。面は出ないということで、そのまま大学病院へ入院することになった。軽い肺浸潤とジン臓炎ということで、食療養では全く反対という皮肉な病気になったものである。病気まで例外的にできている。

一年余の入院生活で胸の方は大体よくなったが、ジン臓の方はタン白尿がなかなか消失しなかった。体のどこにも苦痛はなく時折り起きていても良い程になったので、母は、自分もう暇になったのだから家で看病するので退院したらどうか、と言ってくれた。しかし私は徹底的に治療しようと思い退院を拒否しつづけたので、周囲の人に看護婦にでも好きなのが出来たのでないかと疑われた。漸く退院することになって家へ帰ったが、病院ボケをしたのか尿タン白がいつも気になって便所に検尿の試薬をおき用を足す度にタン白量について一喜一憂する仕末であった。結局食養生と適当な安静を続ける以外に方法のないことを自覚せねばならなかった。

そのうち延期していた徴兵検査を受けねばならなくなった。気候はうすら寒いこをだだったと思う。土地の小学校が検査場になりそこへ適令者が集った。陸軍大佐の肩章をつけた指令官は、一同の集った講堂で開口一番、「検査場に入った以上は軍隊に入ったと同様に、何事も命令に従いささ

かもさからう言動があってはならない”ときびしい訓示をした。私は予め届出がしてあったので、検査は最後に回された。寒い上に長く待たされて、しかも病中でもありすっかり疲れいやになったとき、肩章が星2つ（一等兵）の兵が、恐らく衛生兵といわれるものだろうが、私を便所へ連れて行って、尿をコップに入れろという。その通りにしてコップの尿の濁っているのを一等兵の前へ出すと、いきなり“お前、どこで遊んできた”と怒鳴った。しばらく何のことかとボカンとしていたが、ハハンと思い当って、“尿が濁っていても淋病とは限りません、例外はあります”と答えるや否や、いきなり“生意気だ”といってピンタが飛んできた。私はヨロヨロとして倒れた。軍医と衛生兵の間に連絡がついていなかったのだと思うが、花柳病になる程元気だったらと暗然となると共に、このとき程軍人がいやになったことはなかった。

私はヘトヘトになってしまったが、最後に決定が下されることになって、よろけるような姿勢で指令官の前で一礼して立つと、今の敬礼は何だとまた怒鳴られた。再度やり直しをさせられて一応直立不動(?)になると、“お前は丁種と認定する、もう一、二年しか命はないだろう”といわれた。あの指令官は、その後戦死したか病死したかしてもういないと思うが、今の私を見たら“例外だ”と怒鳴ることだろう。

現在では、徴兵検査の成績など、不明の人が多くなった時代だから、ここらで一応注釈を加えておくことにしよう。検査で最上の体格のものは甲種合格といわれ、間違いなく徴兵される。次は乙種合格で、平時であれば徴兵されない。そのうち第一乙種だと時たま短時間軍事教練のため入営しなければならない。第二乙種は全くの予備兵である。次の丙種合格では、少々の戦争で徴兵されることはない。太平洋戦争の末期では丙種まで徴兵されたから、いかに弱い兵隊が出来たかがわかる。つまり、甲種から丙種までは合格だから、顕在的にしろ潜在的にしろ徴兵される義務がある。最後に丁種は兵役免除で、検査場では全く人間扱いされない。女や馬よりも兵役に無関係な存在である。〈女と馬とを一語にしたら富家さんに怒られますよ——会長〉

大学病院での主治医は、—— 後年福井県で社会党から立候補し、何回か連続代議士になり、今は他界している —— 退院後も好意的に私を家まで時々見舞ってくれた。この体では大学へいくのもむづかしいから家で何か力のいらぬ仕事でもしたらいいだろう、そうすれば60才位までは生きられるから、といわれた。しかし私には他人事のように実感はなかった。あの主治医の代議士さんが生きていたら、また例外だと思うだろう。〈著者は70をはるかに越して、こんなこと書いているのだから、当分代議士さんには会えまい——会長〉 そのうちあまりタン白尿も気にならなくなり、少しづつ元気がついてくるようになった。

そのころ、私のところへ若い写真屋がよく遊びにくるようになった。Nさんといって、仕事はひまなのか1日に2回も3回も黙って入ってくる時がある。若いのに物識りで、私のよい話相手だった。彼から写真の写し方、現像、焼付まで習った。当時、いわゆる満州事変が起きて〈私の生まれた年である——会長〉現役兵ばかりでなく新たに徴集された兵がどんどん満州へ渡り、一般非

戦闘員も多く行くようになっていた。Nさんといろいろ話しているうちに、満州は寒いところ、毛皮を着た人の写真が新聞にも出てくるようになったことなどから、どうせブラブラしているのなら毛皮用の狸を飼ったら、ということになった。初めは本気でもなく話しているうちに二人ともだんだん熱が入ってきて、Nさんは種狸の仕入れ先、飼育法、などを熱心に調べて、私のとこをへ本などよく持ってきた。私はこの機に狸を中心にした動物学的な本や雑誌につられて調べるようになった。いつの間にか私がオーナーでNさんが飼育主任という立場が自然とできた。母は、犬のようなペットを飼うのと違うから止めた方がよい、と強く反対した。しかし、そのころ私の主治医の言ったように大学進学は無理のようだし、思いつきだったが狸に希望をもった。Nさんとは毎日狸について話し合った。私の狸研究も、今はほとんど忘れたが、タヌキ (raccoon dog) の学名はたしか *Nyctereutes viverrinus* だっている。そのうちNさんは、かつて私がひそかに泳ぎにいった大川の向う岸の丘陵に安い良い土地があるから飼育場にどうだと、狸もいないのに早々に土地の話を持ってきた。母は、それこそ「捕らぬ狸の皮算用」の言葉を持ち出して反対した。資金のないオーナーはなかなかゴアのサインを出せなかった。そんなことをしているうちに、Nさんは白山下 (はくさんした) の村から小狸を一びきもらってきた。これは天の助けとばかり、家の庭にNさん手製の小屋をつくり飼うことにしたが、この億病な動物はエサを食わないので困った。人の居る前では絶対に出てこない。夜行性だと書いてあったので夜エサをやることにしたが、十分に食べてくれない。そのうち犬が見つけてほえるようになった。ついに小狸も神経衰弱になったのか、少々食べ始めていたエサもまた食べなくなって、とうとう死んでしまった。Nさんと2人で実物を飼うことのむづかしさを嘆いた。Nさんは、自然の狸を飼うのはむづかしいので養殖場から種狸を買うに限る、と主張した。私は何だかむなしくなり、母の反対も影響してか次第に養狸業に対する熱意もさめ出し、ただNさんの熱心なのに調子を合わせて話し合う程度になった。私の消極化にさすがのNさんも次第に熱をさまさずにいられなくなり、狸のことはあまり言わなくなった。他にもう一つの理由は、退院のころからみてかなり私の体力が回復してきたこともあった。この調子なら来年あたり大学へ行ってみようかと思いついた。

例の主治医は、若し大学へ行ってみるなら体力をあまりつかわない方面ということで、京都帝大の農学部で農林経済はどうかといった。私は、高校は理科を出ているので文科系の大学は思ってもみなかったし、興味もなかった。もうやかましく医科へ進めという父がいなくなったことは、父には申し訳ないが、医科なんて全く私の脳裏から去っていた。農林方面の経済などもろん様子は解らなかったが、私には不経済が向いているだろうと思った。そのときふと、狸を飼うのに多少勉強もしたことだし、京都の理学部・動物学科へ行ってみれば狸でも飼ってみたらと思った。

私の動物学教室志望は最初こんなたわいもない気持ちから始ったのである。

(未 完)

生物地理談話会 始末記

—— 日浦 勇 会員のめいふくをいのって ——

奥野良之助

私は昔から、「会」をつくるのが好きであった。「反戦青年委員会」、といっても今の若い人は知るまいが、戦争だけは御免こおむりたいという、当時の若者が集まってつくった会なのだが、そのとき私はすでに30を越えていて入れてもらえなかった。でも、戦争はやはりいやだから、「反戦中年委員会」というのをつくって、いろんな人に参加を呼びかけたこともある。でも、ほとんどだれも参加してくれなかった。「反戦」はいいが「中年」はいやだ、とか、「中年」はやむをえないが「反戦」は怖いとか、さまざまなことを言って断わられたが、どうも私が主催したのがいけなかったらしい。それでも、この会は、ただ一度、あるデモに「反戦中年委員会」の名をつけたプラカードをひっさげて参加したことがある。そのプラカードをかついでいたのは、何をかくそう、生態学会の万年プリンス、川那部浩哉京大教授である。

「民主青年同盟」略して「民青」という組織もある。私が選路をはるばるやってきたころ、金沢大学の、とくに教職員組合で、大いに勢威をふるっていた。私など、一言発言すると、「お前は金沢大学をつぶしに来たのか」と怒られた。つぶせるのならつぶしてみたい気はするが、私1人ではちょっと無理のようだから、まだ金沢大学は残っている。組織には組織で、というわけで、「民主青年同盟」略して「民中」なる会を設立したところ、これには2～3人参加者があった。縦長の白地に赤色で「中」と書いた、どこかで見たことがあるような旗まで考えたのだが、さすがにつくるのは遠慮した。この会も、会員はそれ以上増えず、大した活動もせず、花の中年もいまや初老にさしかかり、そのうち「民老」と改称しなくてはならなくなってきた。もっとも、子育ては終り、先の見通しもほほついて、大きな望みのもてなくなったわれわれ老人は、体力こそおとろえたが財力はそこそこあり、もっとも過激化する条件をそなえている。そのうち、「反戦老年委員会」でもつくって、大いに活動することにしよう。

「1000メートル以下クラブ」については前号に書いた。このほか、「京大生態学講座在郷軍人会」（反戦委員会とずいぶん矛盾するようであるが）とか、その発展したテロ結社「O A S」

など、まだほかにもあるが、いずれ機会をみつけて紹介することにしよう。

こうした数多い会の中で、唯一学問的な会が、「生物地理談話会」である。この会は、自分で保証するのもおかしいが、大変真面目に日本の生物地理を論じたのである。

私が神戸の水族館で魚に餌をやっていたころだから、もう20年近く前のことである。当時、今と比較すればまだ真面目な生態学者であった私は、日本の生態学をいかにやっていくべきか、といったことを、折にふれて考えていた。本当の話である。そこで、当時最も親しかった、現京都大学瀬戸臨海実験所所長原田英司教授をさそって、大阪ロイヤルホテルに投宿し、夜を徹して語り明かしたことがあった。生態学とはいかなる学問か、われわれは何をなすべきか、といったような内容だったと思うが、あまり記憶には残っていない。ただ、生物の系統を無視した生態学は許せない、生態学は歴史科学としてつくり変えねばならぬ、という点で合意したことはよく覚えている。それは、系統分類学の専門家がだんだん年令をとって少なくなる、いまのうちに勉強しといたら、そのうち方々の大学から特別講師のお声がかかってもうかるで、という、はなはだ現実的な結論が出たので、よく覚えているのである。その時実は、原田氏と2人で協定を結んだ。「オレは魚やるから、せきつい動物を担当する。君はエビヤから、無せきつい動物をやれ。」時移り、星流れて、私は今金沢大学で「系統動物学」という講義をしている。ただし、彼との約束を守り、せきつい動物しか話さない。そして、無せきつい動物の「系統動物学」は、原田先生を特別講師と呼んでいるのである。私はかくのごとく協定を遵守しているのに、彼の方は一度も私を講師として呼んだことがない。まあ、京大には本物の専門家がいるのだけれど。その上原田教授は、金沢大学の特別講義の冒頭に、決まってこういうそうである。「昔、ここの奥野先生と、動物をせきつい動物と無せきつい動物の2つにわけて、1つずつ分担することにした。その時は深く考えなかったのだけれど、いまにして思えば、せきつい動物は1つの門なのに、無せきつい動物には何と門が30もある。こんな不公平なことはなく、まるでサギにかかったようなものだ。君たちも奥野先生のサギには要心した方がいいよ。」おかげで私のところへやってくる学生が年々減って、いまや1人もこなくなり、ヒマをもてあましている。

その「ロイヤルホテル」会談で、もうひとつ決めたことがある。それが、実は、生態学への生物地理学の導入であった。話は少し学問めくが、当時の生態学は、群集とか食物連鎖とか、生態系のエネルギーの流れであるとか、はたまた数の変動がどうしたとか、そんなことばかりが問題にされていて、「種(しゅ)」というものはなおざりにされていた。しかし、地球上に具体的に存在している生物は、種を単位にしている。種は、それぞれ具体的な分布範囲をもっているし、また、そこへいきなり天降ってきたのではなく、その昔、その種がどこかで起原して、いく多の変遷のち現在そこに落ち着いたものである。起原の地から流れに流れてきたものもいれば、起原の地にずっと居ずわっている種もいよう。1つ1つの種の分布範囲をたじかめ、その近縁の種の分布との関連

を見ていくことによって、その種の起原からの歴史を明らかにしていく。生物地理学とは本来そのような学問なのである。

歴史科学としての生態学の再建を目指す私と原田教授が、それを見逃すはずはない。そこで、「日本生物地理談話会」の設立が決まったのである。例によって私が会長となり、会則をつくった。

- ① 会員は生物地理学に興味をもつ者とする。(これなら私でも資格がある。興味さえもてばいいのだから)
- ② 年に2、3度談話会を開く。
- ③ 会では、しゃべりたい者がしゃべり、聞きたい者が聞く。しゃべることを強制しない。(1度も口をきかなかった創立会員もいる)
- ④ 入会・退会・再入会・再退会、すべて自由とする。何だか「日本生物学会」会則によく似ているが、会長が同一人物だからやむをえない。

さて、私たちの呼びかけにこたえて、それでも何人かが集まった。上野の国立博物館の友田淑郎氏、大阪教育大学の水野信彦氏、大阪自然科学博物館(現・自然史博物館)の柴田保彦氏、京大瀬戸臨海実験所の西村三郎氏(現・京大教養部)など、知る人が聞けばびっくりするようなメンバーであった。創立大会は、大阪自然科学博物館の一室を借りて開いた。といっても、現在の長居公園にある立派なところではなく、まだウツボ公園の、市立盲学校の校舎の一部に間借りしていたころのことである。

そのとき、だれが何をしゃべったか、きれいさっぱり忘れてしまったが、いまなおはっきり覚えていることが2つある。その1つは、東京在住の友田氏が、できたばかりの新幹線でかけつけたのはいいが、列車がおくれて、ちょうど会が終了したとたんに現われたことである。こんな会にはるばる東京から出てくるのだから、まさに学問の鬼というべきか。もう1つは、呼びもしない見知らぬ人が出席したことである。中肉中背、目つきすどく、口は達者で、質問はするわ、議論でかみつくわ、しまいには飛び入り講演までやってのけた。自己紹介しないので、だれだかわからない。会も半ばを過ぎたころ、やっとその人物が、当の大阪市立自然科学博物館の日浦勇氏であることがわかった。ともかくその苦蜂は、すどく、あつかましく、しぶとく、論理的で、まさに古代ギリシアのソクラテスが現代に現われたかの如くであり、口には相当自信をもっていたわれわれも、しばしあっ氣にとられてしまった。

かくて、我が生物地理談話会は有力なるメンバーを得て、その後大いに発展した。そのころ、京大地質教室の亀井節夫氏が、「象のきた道」(岩波新書)なる本を出した。昔、日本にもナウマンゾウなどゾウがたくさんいたのだが、かれらがどこから、どの道を通って日本へやってきたかを見てきたように書いてある本である。これを読んだ日浦氏は、「いいかげんなことが書いてある」と怒り出し、みんなで亀井氏をとっめようではないか、という話になってしまった。事の如何を問わず、エライ人をとっめめるほど面白いことはない。そこで全員、にわか勉強をして京都まで出向いていったのだが、健闘空しく亀井先生に全員ノックアウトされてしまった。「上には上がおる

もんやなあ」と、日浦氏と2人で嘆いたことを覚えている。

この「日本生物地理談話会」は、私が会長をした他の多くの会とちがって、その後何回も集会を開いて活動した。それには訳があって、事務局長をひき受けた水野信彦氏が真面目で熱心だったからである。水野氏は、ともすれば面倒臭がってしぶる会長の尻をたたき、ラチがあかんと見るや会長を立てつつ独裁的にことを運んだ。性来ズボラな私には、まさに渡りに舟、水野氏に負かさっただけで、こんな楽なことはなかった。「日本生物学会」にも、そのような人が現われてくれないかなあ。水野氏がこの会を1人で支えていたことは、その後はしなくも証明されることになる。彼は、大阪教育大学から愛媛大学へと転動した。大阪中心に活動していたこの会は、同時に自然消滅してしまったのである。かくて、日本の生物地理学の再建は成らず、生態学もまた、エネルギーと算術に終始することになった。しかし、この談話会で発表された名輪卓史は、記録としては全く残っていないけれども、会員それぞれの血となり肉となり、日本の学問を支えている(?)はずになっている。

会はなくなったけれど、片や水族館、片や博物館の学芸員同仕として、私と日浦氏のつき合いは残った。日本の博物館や水族館や動物園を、見世物小屋から脱皮させ、社会教育施設として発展させるにはどうすればよいか、など、今にして思えばウソみたいだけれど、盛んに論じ合ったものである。彼は、私と異なり、博物館の活動に情熱をもっていた。そして、その情熱は、博物館活動の基礎である調査研究にも向けられ、「海をわたる蝶」(倉樹社)という素晴らしい本を書いた。その後もいくつか書いているが、私は最初のこの本がいちばんすぐれていると思う。日浦氏は、母校の九州大学からのさそいも断って、博物館に打ちこんだのであるが、このあたりも、母校でも何でもない金沢大学へホイホイとやってきた私と、節操の固さが全くちがうようである。

日浦氏は、私の1年下、昭和7年生まれである。だから、これは私と同じだが、権威とみるや逆らうくせがある。私とちがうところは、権威をこわすことだけが楽しみであとは放っておく私に対し、彼は、こわしたあと正しく再建する点である。これは大変な作業であり、疲れることおびたらしい。

ちょうど、私の筋違いの恩師である徳田御稔氏が定年退官したころ、日浦氏が一度合わせろと言い出した。何でも、彼がまともな学者への道を踏みはずし、こんなことになったのは、徳田著「進化論」(岩波全書——ちなみにいうと、これは今出ている「改稿・進化論」ではなく、初版の方で、私たちの世代はこの古い方を愛読して育ったのである)を読んだためなのだそうである。「だから、ひと言恨みを言いたいんや。」私はおそろおそろ、彼を徳田氏の家へ連れていった。ところが彼は、ニコニコして、よれよれになった自分の「進化論」をとり出して、サインをねだったりしている。しまいには、「退職したら気楽になったけど、本書いた時肩書きに困る。まさか無職とも書けんしねえ。ほくの蔵書を君の博物館へ寄附するから、君の所の囁託にしてくれんか。いや

肩書だけでええんや」という徳田氏の申し入れを受け入れて、まんまと徳田氏の蔵書をまき上げてしまったりした。

徳田氏はその後まもなく亡くなられた。そして、当日浦氏も、年令わずか51才で、昨年不帰の客となった。まじめな努力家は、若死するらしい。そういえば、私の直系の恩師宮地伝三郎氏は、83才にしてなおカクシャクとされている。

私もそうだが、日浦氏も、言いたいことを言い、書きたいことを書いてきた。51才はたしかに若いが、野生の動物の寿命は歯が抜け始めるころであり、人間にすれば50位である。これから先は余生であって、体力気力ともにおとろえざるをえない。惜しまれつつ去った日浦氏は、ある意味で幸せであったのかも知れない。

「日本生物地理談話会」の始末記にことよせて、本会会員の日浦 勇 氏の思い出を書いてみた。老年の毛沢東は、エドガー・スノウとの対談で、「あの世へいったら、マルクスや孔子と議論するのが楽しみだ」と言った。日浦氏のことだから、いまごろダーウィンにかみついているかも知れない。

<< 編 集 者 へ の 手 紙 >>

謹 啓

立春とは名ばかりで、東京といえども白雪皓々たる日々、北地金沢にてはいかがお過してご
いまいしょうか。

この度初めて投稿させていただきますので、寛恕御覧下さいませ。

又、先日会誌第十六号を御送付いただき有難うございました。丁度、拙文に筆を下ろしていた
折、編集局日よりパート3を拝読御大変恐縮いたしました。

会長のコーヒー代のためにも、一時は投稿を中止することも愚考いたしましたが、折角会長御
自らの、あからさまな原稿欲しさ故の跳発をいただいた上は、ナシのついででは却って失礼に当
たるものと存じ、又、会長、仰有る所の「おちこぼれ教官」のお奨めもあり、拙文の呈正に及んだ次
第でございます。御自愛専一の程を。

啓 具

1984年2月

○ ○ ○ ○

日本生物学会会長机下

追 信

先日、駒場の若いのが大量入会して、驚ろかれたことと存じますが、さらに駒場支部設立の運
動が起こりましたのでお知らせ致します。

現在、書記局長なるものを自称する者が、宣言文を起草しつつあるそうで、荘麗なものとなる
とのことですが、当分、稿の成る様子もありませんので、大概のところを御案内致します。

- 本支部の正式名称は「日本生物学会東京郡目黒区駒場三ノ八ノ一支部」とする。
- 組織は封建制を取り入れ長幼の序をもって律す。(したがって、年をとっていれば、支部長より
もエラクなる。先に生まれた方が勝ちとする、早い者勝ちの原理である)
- 役職名は自称すれば直ちに発効。(これも早い者勝ち)
- 資格は、目黒区駒場三ノ八ノ一に在住もしくは通学、勤務する者………としようとした所、
駒場に通学も通勤もしていない三鷹市の住人が勝手に副支部長と称してしまったので、次の様に改
めました。
- 支部会員資格は、駒場で支部長と酒を飲む者、または、飲むことが出来る者。よって、正当な
理由なくして、支部長の酒の相手をこぼむ者はクライである(よって支部長と飲む気があれば、金

沢の住人でも、サラエボ在住でもかまわない)

- 分派闘争は、内部矛盾があるようで、カッコイイので、これを奨励する。
- 当分のスローガンは次の通り。
 - 1 生態系の反動的再編粉碎
 - 2 会長の機動隊導入ドウカツ糾弾
- 尚、お察しの如く、私が初代支部長であります。

追 追 信

原稿をワープロで書いたのは、私の字に自信がないこと（異議ナシ！一会長一）と、ワープロなるものを一週使ってみたかったからでありまして、決して、「金沢みたいな田舎にはワープロはないだろう」とのイヤミでもなく、ましてや「関西人にはワープロはもったいない」などといった下心のあらわれでもありませんので、どうか、お気を悪くなさらないで下さい。

<< 編集局だより >> パート 1

◎ 編集局長に就任したものの、仕事らしい仕事もなく、毎日なんとなくコーヒーを飲み、ぼんやりとすごしていたところ、たてつづけに原稿が寄せられてきました。いよいよ腕の見せどころ、とはりきったのもつかの間、我が学会では原稿を、無審査、無修正の上、無責任に掲載する、ということに気づきました。私はいったい何をすればよいのでしょうか？ 会長にそうきつ問うると、「論文の掲載順を決めるという仕事がある」とのこと。せっかくはりきっているところに少なからぬ脱力感をもよおさせる答でしたが、気もちなおし、それでは先輩の仕事を参考にしようとしてバックナンバーを見てみると、「前の局長は原稿のとどいた順に機械的に決めてたで」と会長から追い打ちをかけられ、完全に力がぬけました。それでも「最近コーヒーのいれ方がうまくなった」といわれ、少し気をよくしています。

ところで、当研究室のコーヒーの中に、人をなまけものにする成分が混入していることはたしかのようです。もっとも、会長にいわせると、その人のかくされた本質を表面化させる成分だそうですが。

◎ 編集局長と会長の会話（その1）

局長：久しぶりに澄田先生の力作の続きが登場しましたね。前の編集局長が原稿もらいに日参していたとか。

会長：前の編集局長は買取に弱うてなあ。コーヒー1杯ですぐ手ぶらで帰って来よった。君は大丈部か。

局長：ほくならコーヒーにケーキがついても、原稿はとってきますよ。今度もとってきたでしょう。

会長：90枚はとりすぎやで。1号分埋まってしまうがな。

局長：それにしても、この論文は難しいですね。ほくにはよう解らん。

会長：君たちはだいたい考える力がなさすぎていかん。このくらいの内容でヘキエキするようでは編集局長はつとまらんぞ。オレなんか若いころ、マルクスの「ドイツ・イデオロギー」くらい電車の中で読んだものや。

局長：何ですか？ その本は。

会長：それも知らんのか。とにかく難しい本なんやで。

局長：そんな難しい本、解ったんですか。今の会長見たら信じられへんなあ。

会長：その時は解ったけど、みんな忘れたから今は解らん。本にはちゃんと筋引いてあるから、読んだことは確かや。

局長：いくら読んでも忘れたら何にもならんやないですか。

会長：そやかて、忘れなんたら次がはいらんやないか。

局長：……………？

◎ 編集局長と会長の会話（その2）

局長：もうひとつの力作「例外人生」というのは、よく解って面白いですね。でも、ペンネームの“不名誉教授”というのはい体何ですか。

会長：大学では教授を長く勤めると、退職後“名誉教授”という称号がもらえるんや。ところがこの人は年限が少々足りなかった上に、何しろ「例外教授」でなあ。名誉教授にして当らんかった。それで、我々みんなて、“不名誉教授”第1号の称号を奪ったというわけや。

局長：ようそんなことしましたね。怒られたてでしょう。

会長：いや、何でも第1号いうのはええ、と喜んではったよ。

局長：へえー、変な教授ですね。そんな教授、今はいないですね。

会長：この人は日本生物学会の不名誉会員第1号でもある。この時は2り00円払うのに大分抵抗しはった。そのかわり、退職したあくる日に現われて、「わしは今年から定職なしの会員や」言うて、100円おいていきはった。

局長：会長の知人というの、変な人ばかりですね。

会長：向うの方がずっと年上やから、この人の友達がみんな変な奴や。

局長：……………？

◎ 編集局長と会長の会話（その3）

局長：“編集者への手紙”の東大生、生意気ですね。

会長：何がや？

局長：“金沢みたいな田舎にワープロはないやろう”とか「関西人にワープロはもったいない」とか、わざわざそんな気はないと断わるところは、本当はそんな気があるからでしょう。

会長：君も、人の心の裏を少しは読めるようになったな。しかし、まだ修養が足りないね。奴はもっと高度な意地悪を仕かけてきてるんやで。

局長：ほんとですか？ ぼくには解らんなあ。

会長：あのワープロの原稿な、A4版でつくってきてるやろ。本誌はB5版やからそのまま使えんようにしてきてるんや。オレにタイプで打ち直させたらうと思うてな。

局長：うーん、なるほど……と言いたいけど、それはちょっと考えすぎやないですか。

会長：だからまだ君は甘いというんや。それで、こっちも高度な仕返しをしてやることにした。

局長：何するつもりですか？ 除名ですか。

会長：そんな低次なことはせん。縮小コピーでB5版にして、そのまま使ってやるんや。

局長：それが“高度”というものなんですかねえ。

会長：高度なんてそんなもんだよ。

<< 編集局だより >> パート 2

◎ 編集局長補佐と会長の会話

補佐：この間はコーヒーにケーキ付で、ごちそうさまでした。

会長：まさか架空の人間が、コーヒー飲んだりケーキ食べたりするとは思わなんだ。

補佐：いえいえ、局長はどうか知りませんが、補佐は実在してますよ。あんまりそんな事ばかり言っていると、実は会長も実在してませんでした、なんてことになってでも知りませんよ。

会長：会長は独裁権力を持ってるんやで。局長だろうと補佐やろうと、まっ消するくらい、わけはない。

補佐：それじゃ近ごろ政府の言ってる事と同じじゃないですか。減税、減税、と言いながら、減税は架空で、実は増税だったりして。

会長：虚々実々の世の中やもんな。あんまりぐだぐだ言っていると消してしまうぞ。

と言いながら、会長が万能インク消しに手を伸ばしそうになったので、あわてて補佐は話題を変えた。

補佐：ところで会長、なんで駒場から原稿が来たかについて、^秘情報が入ってるんですがね。

会長：何や、それは。

補佐：何でも、最近のバイオテクノロジーの成果の副産物らしいんですがね。執筆意欲中枢刺激物質というものがあるんです。会長には必要なさそうすね。

会長：オレには執筆意欲中枢マヒ物質が要ると言いたいんやろ。

補佐：それに偏差値特異抗原というものがある、それに対するモノクロナール抗体が作られたそうです。この抗体は偏差値の高い、つまり共通一次で高い点をとった東大生なんかだけに反応するんです。

会長：ヘンなもんやね。

補佐：それでね、この抗体に執筆意欲中枢刺激物質を結合させて駒場近辺にばらまいたってことなんです。

会長：ばらまいたくらいでは効かんのとちゃうか。

補佐：それがね、詳しいことはわからないんですがね、何でも、カとかノミを使ったとか。ほら、連中はマラリアとかペストを伝染させるでしょう、あれと同じやり方でやるんです。

会長：うん、それは一理あるなあ。駒場でカヤノミをまけば、生き残るのは駒場寮の中だけにちがいない。

補佐：このノミにかまれたら、とにかく何が何でも書きたくなくて、書き終るまで全身がムズムズするんだそうです。もちろん本人はそんな事自覚してないし、ただ何とはなしに書こうという気分になるだけだそうですがね。

会長：もしその話がほんまやとしてもやで、いったいだれが何のためにそんな事するんや。

補佐：もしかしたら、会長が一番よく……………

補佐の言葉をあわてて途中でさえぎって、

会長：しかし、やね、もし君が実在してないとすれば、やね、君の言ってることが事実であり得るのかね。

補佐：私はもちろん実在してますよ。もし実在してないというんなら、ケーキを食べたのは一体だれだったんですか。

会長：いや、君が存在してたのは、コーヒー飲んでケーキ食べてた間だけやったんちやうやろか。

補佐：まあ、何せ独裁会長の言うことですから、コーヒーかケーキのあるときだけ存在することにしてもいいですけど……………

と言い終らないうちに、補佐の姿は陽炎のように揺れて薄くなり、やがて消えてしまった……………

日本生物学会誌 第17号 1984年3月30日

編集・発行 日本生物学会

金沢市丸の内1の1

金沢大学理学部生物学教室

生態学第1研究室内

編集無責任者 奥野良之助

許可無断転載